



# ソーラーカー普及へ走る

## 篠塚 建次郎 さん

ち三菱自動車から声がかかり、入社後、国内外のラリーに出場した。

黒光りする太陽光パネルを張ったソーラーカーは、幅約1.8m、長さ約5m、重さはわずか150kg。空気抵抗を排除した平たいデザインは、とても車には見えない。だが、太陽があれば発電した電力でモーターを回し、時速100km以上でどこまでも走る。

「走りだけを追求した美しさがソーラーカーにはある。豪華な車が増えたが、車はもっとシンプルでいいのでは、ということとを気付かせてくれる」

パリから西アフリカ・セネガルの首都ダカールまで。サハラ砂漠を越えて1万km以上を駆けける「パリ・ダカールラリー」に1980年代から参戦し、数々の栄冠に輝いた。2008年からはソーラーカーレースに参加。「太陽エネルギーの普及」という新たな道を進んでいる。

車好きの父親の影響で、「小学生の時から庭で運転していた」と言つ。東海大1年の時、仲間を誘われてラリーに出場した。限界まで車の性能を引き出して未舗装の道走る魅力に取り付かれた。好成績を収めるう

「まだ走れる」と思っていた53歳の時、年齢を理由に引退を勧められた。退社し、日産と契約してパリ・ダカールに出場したが、思ったような成績は取れず、2007年が最後のパリ・ダカールになった。

て報告会を開いた。多くの聴衆が集まり、ラリーで乗ったスポーツ用多目的車「パジェロ」は売れに売れた。「自分が走ることで車が売れるのが喜びだった。会社員だからできた仕事だった」と語る。

08年春、母校の東海大を訪ねた際、関係者から南アフリカで開かれるソーラーカーレースへの参加を頼まれた。同校にとつて、4000kg以上を走破する南アのレースで勝つには、パリ・ダカールの経験が必要だった。初めて乗ったソーラーカーはエンジンの爆音ではなく、モーターの静かな音だけが響いた。10日ほどかけて、学生と交代しながら走り切った結果、優勝を飾った。

「太陽光だけで4000kgも走ってしまった。これってすごいことなのではないか。温暖化防止にもつながるはずだ」  
翌年、オーストラリアのラリーに参戦した。この時、走ることにアピールするのが、これからの「一生の仕事」だと考えている。  
(小山孝)



しのづか・けんじろう ラリードライバー。1948年、東京都生まれ。大学在学中に三菱自動車のラリードライバーとして参戦、71年に同社入社。91年、世界ラリー選手権で日本人初優勝。パリ・ダカールでは優勝1回、2位が2回、3位が4回。現在、「ソーラーカーチーム篠塚」代表。各地で安全運転講習会も開催。

「パリ・ダカールでは人も車も太陽の熱さに苦しめられたが、ソーラーカーに乗ってからは、太陽のありがたみを感じます」(東京都新宿区のイベント会場で) 〓 米山要撮影